タンザニア、セレンゲティ国立公園に隣接する村のため池。乾季になるとゾウが来てしまって危険

野生ゾウと「共生」できる「距離」とは？

岩井雪乃 早稲田大学

ゾウは、アジアとアフリカに生息する動物であるが、近年、多くの生息国で、ゾウによる農作物および人身被害の問題が拡大している。動物園や観光地で飼育されているゾウは、人を乗せて温厚そうなイメージがあるが、野生ゾウはそうはいかない。他の野生動物と同様に、ばったり人に出くわしてしまったら驚いて襲ってくる。それも、人間の息の根を止めるまで追いかけてくる。昨年、クマによる人身被害が多発して恐怖を感じた日本人のみなさんは、野生ゾウに対する住民の恐怖感に共感してくれるだろう。

しかし、ゾウは、観光の人気動物であり、絶滅が危惧される種でもあるため、保護の国際的な圧力が高い。私が活動するタンザニアのセレンゲティ国立公園周辺の村落では、ゾウが農作物を荒らすのみならず、さらには人を殺しても、そのゾウが駆除されることはない。政府のレンジャーは、国立公園に追い返すことしかしない。

写真の村では、ため池で人びとが水をくみ、家畜に水を飲ませるが、そこに、ゾウも来るようになってしまった。写真だけを見ると「平和に」「共生」できているように見えてしまう。しかし、実際の現場は緊張に包まれている。いつゾウが襲ってくるかわからない恐怖の中で、それでもここで水をくまなければならない。この写真を撮る2日前にも、牛が2頭、興奮したゾウに牙で突かれて殺されたばかりだった。住民が安心して生活できるゾウとの距離は、どうやって保つことができるのか。われわれ、国際社会の姿勢が問われている。